
ミヤコワスレ

木月 愛美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミヤコワスレ

【Nコード】

N2310B

【作者名】

木月 愛美

【あらすじ】

この花が咲いたらまた会おう。彼との約束。暫くしてその花が咲いて…。

この種が花をつけたらまた会おう、そんなロマンチックな約束をして二人は別れた。

わたしはどのような花が咲くのか、わくわくしながら毎日水をやった。精一杯大切に大切に育てた。決して枯らさぬように。

花の名は聞いていない。種の形から調べることもできるのだろうけど、それはしなかった。育っていく花だけを見たいと思ったからだ。名を調べるのは花をつけてからでいい。

もしかして種がふやけてしまったのかなと心配になってきた頃、種は芽を出しかわいい双葉を開いた。次にそこから上に伸びて、紫色の蕾をつけた。彼に会える日が近づいていると思うとわたしの胸は踊った。

一緒に住んでいる母も綺麗な花が咲きそうねと、喜んでいる。

「ずっと思ってたんだけど、そのミヤコワスレどうしたの？」

母が尋ねてきた。

「あのね、彼に貰ったの。この種が花をつけたら会いに来てって言われて。それとこれミヤコワスレって名前なの？」

「うん、そう。ミヤコワスレ。本当に彼に貰ったの」

「そうだけど…。何か？」

それ以降母は黙りこくってしまった。わたしは不思議に思ったけれど、大して気にはしなかった。

それからしばらくして、ミヤコワスレに花がついた。可憐で、でもどこか切ない紫色の花だった。やっと、やっと、彼に会える。

「お母さん、行ってきます」

母にそう告げ、ドアノブに手をかけた時だった。母の声がわたしを呼び止めた。わたしは何？ と返した。

「…ううん、何でもない。いってらっしゃい」

「はい、行ってきます」

…どうかしたのかな。

わたしは片手にミヤコワスレの入った籠を持ち、浮ついた足取りで駅への道を急いだ。切符を買って、発車寸前の電車に滑り込んだ。電車はガラガラだったので、椅子の一番端に腰掛けることができた。嬉しいな。ふふ。思わず笑みが零れる。

籠の中のミヤコワスレを眺めていたら、ふいに名案が浮かんだ。花言葉を調べてみよう。わたしはバックから携帯を取り出して、ウェブに接続した。ページが開くまでの時間がじれったい。そうしてやっと花言葉を調べることができるページにたどり着いた。わたしは花の名前を入力した。

ミヤコワスレ

この気持ちは期待である。次のページが楽しみだ。

母の不自然な態度の意味も、彼がわたしにミヤコワスレを持たせた本当の理由も、わかった。とびきりのロマンチストである彼らしいやり方だった。

ミヤコワスレの花言葉——別れ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2310b/>

ミヤコワスレ

2011年1月12日15時03分発行